

## 内村鑑三とキリスト教文学

小 田 丙 午 郎

### 一

一八九一年（明治二四年）一月八日、第一高等中学校の教育勅語奉戴式における内村鑑三の敬礼躊躇はいわゆる「不敬事件」とし世間に波紋を惹起した。これは内村には言わばルター注一のウォルムとなった。

この事件後二年を経て彼は「基督信徒のなぐさめ」を著わした。この著作に続いて同一年「求安録」が出版された。

序にこの二書が書かれた時、内村は三三歳。その生活ぶりは正に貧のどん底であった。これらを包含し、延長しそうして完成したのは、後にドイツ語、スエーデン語、フィンランド語またデンマーク語に訳された「How I became a Christian」であり、これが内村の名を世界的にした。なおこの書が上梓されたのは、一八九五年。

「基督信徒のなぐさめ」と「求安録」と「How I became a Christian」。誰が呼ぶともなしにこれらの三部作は内村の三大名著とされるようになった。

一九六〇年（昭和三五年）山本泰次郎の手によって内村鑑三全集が編集された。この全集は聖書注解（一七卷）信仰著作全集（二五卷）と日記書簡全集（八卷）からなっているが、以上の三大名著は全集中の圧巻であろう。

では三大名著は基督者内村鑑三においてどのような意義を持つのであろうか。

この問題に触れる前に、私たちはこれら三書のそれぞれについてその梗概を素描しなければならぬ。

先ず「基督信徒のなぐさめ」から。これは書名が示唆するように人生苦に対する基督教徒としての解決をテーマとしている。その内容を掲げれば次のとおり。

愛する者の失せし時。国人に捨てられし時。キリスト教会に捨てられし時。事業に失敗せし時。貧に迫りし時。不治の病にかかりし時。

このような人生苦を扱ったのは旧約聖書のヨブ記である。因に旧約文学の類別によればヨブ記は「知恵の書」と言われる。「基督信徒のなぐさめ」もこう呼んでよいのだろうか。「基督信徒のなぐさめ」の主題は上に述べたように人生苦であるのに対し「求安録」においてのそれは人間悪でありここにあらわれるのは人間内村の深刻なる良心苦である。このように切々とした良心苦を訴えたのはアウグスティヌス（三五四—四三〇）の「告白」ではなからうか。が良心苦の様相においてこれら二人の間に一線が画せられるように思われる。バニヤンの小説「天路歷程」の主人公は滅亡の町から天の都を目指して旅を続ける。彼はその途中底なしの泥

沼に落ちる。ここを救い出されて彼はさらに前進する。彼は急坂を登って行く。この頂上は火焰を吹いている。アウグステイヌスは墮落の泥沼に呻いている。これに反し内村は墮罪の急坂に戦っている。この意味において内村の心事を代弁するものは「ローマ人への手紙」に記されている左の一句ではなからうか。

わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしていくからである。もし、自分の欲しない事をしていくとすれば、わたしには律法が良いものであることを承認していることになる。そして、この事をしていくのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。七・一五—一七

パウロはこうした魂の呻吟を発しながら遂に

「わたしたちの主イエス・キリストによって神は感謝すべきかな。」と凱歌を奏している。それはそのまま「求安録」の著者の場合である。

「How I became a Christian」は何故に英文で書かれたか。言わずと知れたこと。これは外国人殊にアメリカ人を読者に宛てて書いたから。

内村鑑三伝の記者たちは彼が札幌農学校時代に入信したと記している。これは、しかし、彼の他律的な改宗であって真の意味での回心ではなかった。彼の自律的な回心を促したものは浅田<sup>三</sup>タケとの離婚であった。これは彼の私事であった。キエル<sup>四</sup>ケゴールはレギーネ<sup>三</sup>オルセンに對し婚約を破棄した。この一つの出来事は彼の思想形成課程に密着している。内村の場合もまたそうではなからうか。

彼はこの事件後アメリカに渡った。内村鑑三の伝記記者はこれが罪の苦悶の解決のためであると記している。彼の滯米生活は三年足らずである。この間において彼の発願に応えたのはアマスト大学の総長シーリー博士との出会いであった。彼が博士から示されたのはキリスト教の中心真理すなわち、イエスの十字架の死による罪の贖いであった。これも序ながら、彼が帰朝したのは一八八八年五月。

「How I became a Christian」は彼の回心記である。これは、しかし、単に回心記の一語で尽されるのであろうか。

内村が回心を経験したのはアメリカにおいてであった。が彼の回心はアメリカの教会にも神学校にも負うものがなかった。いな、キリスト教国としてのアメリカは有名無実とはおろか、ユダヤ人におけるバビロンであった。

内村にはアメリカのキリスト教国意識への抵抗が押え切れなかった。殊にこの国の異教徒に対する優越感と異邦伝道における残酷性に対しては内村は火のような憤りを催した。日本人の伝道は日本人によって。

この書において彼が訴えるものはこれである。

諸君は、私が愛する者たちにやがて会う幸福に浸っていたと思われるか。しかし、戦争の後で勝利の夢に浸る兵士が幸福だという意味で、私は幸福であった。私は神に発見された。神は私に帯をしめさせ、わが望まぬ所へ伴い行くことをほのめかしたもうた。神はわが小なる世界の中で私に戦闘を命じたまい、私は否と答えられなかった。ああ私は多くの戦いによって神を探し求め、ついに神を発見した。すると神はただちに戦場に向かえと命じたもうたのである。これこそは武士の

家に生まれた者の運命だ。つぶやくことなく感謝して。それを受けよう。(鈴木俊郎訳「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」)

これは回心記以上である。これは正しく召命記である。人は内村鑑三に愛された名として二つの J (Japan と Jesus) と想起する。これは彼が札幌農学校を卒業する時の誓いの表れであった。「How I became a Christian」は「の誓いが成就したのではなからうか。」

内村鑑三の生涯が最高潮に達したのは何時であったか。これに就いて私たちは内村鑑三自身の言葉を左に掲げよう。

余は此所(大日本私立衛生会)に大正八年五月より同十二年六月まで満四年に渉り、日曜日毎に聖書を講ずるの自由を許された。(中略)。聴衆は凡ての階級を網羅し、基督教各派の信者、教会以外の信者、又自から信者と称せざる者、又仏教の僧侶さへをも其内に見た。実に日本に基督教が伝へられて以来、未だ曾て見たことのない聴衆であったと思ふ。(中略)。余自身に取りては余の生涯の最高潮に達した時であつて、五十九歳より六十三歳に至るまでの間、此樂しき事業に従事するを得て感謝此上なしである。

さらに附記することが許されるならば、右は「羅馬書ローマ書の研究」の序文の一節、著者の記載月日は大正一三年(一九二四年)七月五日。「羅馬書の研究」は講演の要約である。それは講演体で書かれている。その平易な文体も手伝つてか、この書は広い読者層に滲透している。そうしてこの内村の伝道成果の上に果した役割は彼の生前にも歿後にも測り知られないであろう。「ローマ人への手紙」と言えば人はルターを想起する。彼もまた一五一七年まで四ヶ年この手紙をウィッテンベルク大学で講義し

た。この講義の意義は、しかし、内村のそれと同一であろうか。ルターもまたこの講義に命を賭した。がこの講義は宗教改革の原理を方向づけてもその現実の原動力とはならなかった。

内村は求道に自己集中をした。それは三部作において結実した。言い替えば三部作は内村の信仰生涯の核心となった。そうして内村の伝道生涯は、例えれば、この核心を焦点とした楕円を描いて自己拡大をしたのではなからうか。

## 二

再び「基督信徒のなぐさめ」について。この書が一九二三年(大正二年)に改版された時著者は回顧三十年と題し、次のような書き出しの序文を附している。

この書、今年をもって発行満三十年に達す。大なる光榮である。感謝に耐えない。

今より三十年前に、日本において日本人のキリスト教文学なるものはなかったと思う。もしあったとすれば、それは欧米キリスト文学の翻譯であった。

右に掲げたのは、著者の出世作に就いての自己評価である。彼が自らの作品に与えるのはキリスト教文学である。彼は、では、どんな意味においてキリスト教文学という言葉を用いているのであろうか。私たちが知っている限り、ヨーロッパにはその構想のアイデアを聖書に示唆されているものがある。シェイクスピアはその構想のアイデアを聖書に示唆されているものがある。シェイクスピアのハムレット。ゲーテのファウスト。

註五 カールライルの衣裳哲学など。

これらは、しかしその底流に動いているものが、異教的である。少な

くともキリスト教的とはい切れない。内村の言うキリスト教文学にはこのようなのは異質的ではなからうか。一方西洋ではキリスト教信仰や精神がそれぞれの時代にあつて、それに対し詩歌の表現をとって自己具現をしている。スコラ哲学を代弁するダンテの神曲、カルヴィニズムに呼応するミルトンの「樂園喪失」などがそれである。

内村によって意味されるキリスト教文学とはこのようなものではなからうか。がそれにしても内村のキリスト文学は直ちにこれらに系譜を溯られるのであろうか。

なるほど「基督信徒のなぐさめ」が発行された頃、日本にはキリスト教文学の名に値するものがなかった。

しかし、この時期に、日本の教会はキリスト教的著述において不毛ではなかった。内村の出世作が世に送られるに先立つこと八年前、植村正久（一八五八—一九二五）は「直理一斑」を発行した。これは彼の処女作。彼はこの一書の構想に筆致に精魂を尽して神の存在を証明しイエスの神性を弁明している。これも画期的な名著。我が国の神学書のナンバーワンではなからうか。「真理一斑」は植村の力作である。これは、しかし、彼の創作であらうか。

もし人がこの時代カルヴィンの「基督教綱要」に通暁していたなら、植村の「真理一斑」に何を見出したのであろうか。彼の思惟形式は既にカルヴィンの中に用意されていたのではなからうか。

内村の場合におけるように「真理一斑」は植村の生涯を方向づけた。つまり彼は欧米のキリストと教会の思惟形式を厳密に言えば、正統神学をこの国に移入し、これを継承し、そうしてこれに順応することを使命

としたのではなかったか。「真理一斑」に後れて二年目に「政教新論」が著わされた。その著者は小崎弘道。小崎が本書を通して意図するのは、日本の封建体制から近代制への脱皮とその体質改善として儒教からキリスト教への転向である。これはキリスト教と儒教との対比である。これは、しかし、キリスト教と儒教との対決であらうか。彼のキリスト教が儒教のレンズから覗かれたように思われるのは僻目であらうか。もう一度内村の所掲の序文の中のキリスト教文学に含意されるものを考えよう。

内村がキリスト教文学と発言する背後にあるのはこれまで述べて来た「真理一斑」と「政教新論」とに対する批判とそれらからの別コース発見ではなからうか。

### 三

彼は在米中にハートフォード神学校に学んだ。彼は、しかしここではパンを求めて石を与えられた。彼は神学に救いを期待して反って滅びを予感した。

「なんじの神エホバの名をみだりに口にあぐべからず。エホバはおのれの名をみだりに口にあぐる者を罰せではおかざるべし」との戒めは、余をしてこの危難よりまぬがれしめんがためなり。聖名を汚すの罪は教役者の罪にして、彼の大危険は実にここに存するなり。

彼がハートフォード神学校を半途退学した最大のそうして最後の理由はこれであつたらう。

彼は神学校を去った。いわゆる捨台詞を残して。

しかり、神学校も罪よりの逃れ場所にあらざるなり。もし個人的悪

魔の存在するありて、人類を悩まさんと欲せば、その善性の源なる神学校を濁すにしかず。しかして教導師養生所たる神学校が悪魔攻撃の焦点たるの徴は一にして足らざるなり。学生中最も不品行なる者は神学生なりとの批評は、余のもちろん信ぜざるところなり。されども彼らが清浄と徳義とを講ずる割合に思想の卑陋にして品性の高潔ならざること、否定すべからざる事実なりと信ずるなり。

神学校に訣別した彼が神学に、そうして神学者グループと断絶したことは言うまでもない。彼の著述は各方面にわたっている。それだけに彼に紹介される学者の数は多い。が彼のキリスト教の講演にもまた聖書の講解にも見出されるのは著名な註解者例えばゴデー、ベンゲル、マイアーの名であつて、神学者たちのそれは殆どない。もし私たちが彼のヨハネ伝研究においてその著者性に論及する箇所に触れるならば、ここに注は註解者の名前が宛らのリストをなしている思いがする。(内村鑑三全集第五卷)

新約聖書上) 彼が神学者の名を口にするのはイスラエル民族が仇し神の名を忌むに似ているのではなからうか。彼はキリスト教会史を次のように解釈している。

この歴史は教役者(神学者を含む)と平信徒との闘争のそれである。彼は救済史において平信徒が教役者に対し勝利を占めることを信じてその生涯を終えた。

こうした消息が窺われるのは彼の愛読したヨブ記に関する以下の意解である。

ビルダテと彼の同輩とは回顧者なりし、彼等は支那人に類して古老尊拝者なりし、彼等の説く処は古人の説を繰返すに過ぎず、革新は彼

等の堪えざる所なりし、彼等はヨブが大胆に新説を提出するを怪めり。幸ひなるかな、彼等は独創的意見を懐くの危険あるなし、彼等は古書を調べ、諺を伝へ以て「忠臣愛国者」たれば足るなり、然れども神の人は常に今の人なり、彼は新たに神より黙示を受けし人なり、故に彼は世の忌む所となる、彼は傲慢なりとして人に迎へらる、彼は世の解せざる言を語る、彼は古人を排斥して、活ける今日の神に従はんとす、而してヨブは斯かる人なりしなり、彼は心に直に神の霊を受けたり、故に彼は独創の人となれり、彼の言語に粗雑なる所はあらん、然れども彼は祖先の神学を繰返す者にあらず、彼の友人が彼を解せざりしは主として茲に存す、即ち彼等は「神学者」たるに對して彼は信者たりしが故なり、彼等の宗教は耳にて、聞きしものなるに對して彼の宗教は心に感ぜし者たりしなり、兩者の間に誤解ありしは宜べなり、そは死は到底生を解し得ざればなり。(内村鑑三全集第三卷)

人間形成と人生の危機において神学が果し得る限界に就いて懷疑を投げたのは内村だけではない。メフィストフエレスの口を藉りて

きみを誤らせたくないものだ。あの学問とぎては、邪路を避けるのが困難だ。あの中には、見えない毒がたくさんひそんでいる。それを薬と区別するのはほとんど不可能だ。この学科でも一ばんいいのはただひとりの講義をきき、その先生のことばをかたく信ずることだ。総じて―ことばにたよるにかぎる―そうすれば、不惑の門から確知の堂に入る事ができる。(高橋健二訳一九八五)

フアウスト一九九〇)

と歌ったゲーテはそれであろう。ゲーテが神学を全面的には否定しないように、内村もまたそうであった。

彼は歴史家ネアデルの言葉をどれだけ繰返しているだろうか。すなわち「神学の中心はハートなり。」を

内村のキリスト教文学の基調をなすものは「神学の中心はハートなり」ではなからうか。

#### 四

正宗白鳥の「内村鑑三論」は数多くの「内村鑑三伝」の中で異色なものである。白鳥は青年時代にキリスト教に心をひかれた。その要因となつたのは内村の著作であつた。

白鳥は信仰に就いて直接には植村の個人的助言に与るところが多い。

が文章に關する限り彼は植村より内村に魅せられた。植村は格調の高さにおいて文藻の豊かさにおいてまた筆致の巧みさにおいて明治のキリスト教会の文筆の雄である。白鳥が内村の文章をより高く評価するのは何故であろうか。白鳥の作品に關して一つは確かである。彼の文章が淡々としてゐることは。内村の文章もそうである。

余は始めに地理学者とならんと欲した、札幌農学校に入りし時の余はそれであつた。

余は其次ぎに水産学者とならんとした、札幌農学校を出し時の余はそれであつた。

余は其次ぎに慈善家とならんと欲した、米国に渡りし時の余はそれであつた。

余は其次ぎに教育者ならんと欲した。米国より帰りし時の余はそれであつた。

余は其次ぎに社会改良家とならんと欲した、朝報社に入りし余はそ

れであつた。

余は其次ぎに聖書学者とならんと欲した、ルツ子を葬りしまでの余はそれであつた。

余は今は何者にもならんと欲しない、又何事をも為さんと欲しない、唯神の遣はし給ひし其独子を信せんと欲する、余が今日為さんと欲する事はイエスが人の為すべき事として示し給ひし業である。

この文のどこにも文飾が見られない。がこれを読む時、人は孔子の「我十有五にして学に志し」に始まる自叙伝的語録を想起しないであらうか。

白鳥が内村に關心を寄せるのはその文に始まるその人である。文は人なりと明治の文人が言つたように、内村の文が多くの人に読まれるとすればその文に呼応するその人ではあるまいか。すなわち、平易な文体と平民的な人柄。内村は下級武士の血を受けた。パウロがその血統を誇つたように、彼もまた武士の名を恥じなかつた。武士道的キリスト教の名は彼が唱へ出したのではなかつたらうか。他方彼は自らを平民の地位に置いた。彼が人間イエスにおいて見た最初のもものは平民であつた。彼の心理構造の中には武士と平民と互に異質的なものが生きていた。内村の言う平民にはどのような内容が含まれていたのであらうか。それには、もちろん階級的な農工商が加えられていた。彼が維新の薩長政府に向け毒舌と思われるまでの攻撃をしたのはこれらの階級の利益を代弁したものである。さらに日露戦争に際し彼が非戦論の立場を天下に声明したのには信仰的理由を外にこうしたメンタリテイが伏線となつてゐる。内村の平民は、しかしその精神性に重点が置かれていたように察せられる。

すなわち、働く事にその生き甲斐を求めること。類々な思弁よりも自明の常識を選ぶこと。殊に腕一本に生き敢て何人にも依存しない自由と独立の象徴として労働者は内村の魂を魅したのであった。

内村の反骨精神に影響されて、傘下に集った青年たちの中には有島武郎、志賀直哉、武者小路実篤などの文人がいた。かれらは内村と袂を分った。内村の側からすれば、これらの青年は頭脳の人であり、手足の業とは縁のない連中であつた。内村の作つた数少ない詩の中に「桶職」と題する労働者の讃歌がある。その一節を掲げれば

我は唯桶を作る事を知る、其他の事を知らない。

政治を知らない。唯善き桶を作る事を知る。

戦後内村鑑三は世人の注目の的となつた。その多くの理由は彼が日本の近代化の上に果した役割のゆえらしい。内村は、しかし近代、少なくとも近代人という語には嫌悪を感じている。彼の門弟たちが近代人と呼ばれることは、イエスを売つたイスカリオテのユダと同義を含めてるようにも受け取られる。社会的なまた歴史学的な意義の近代は内村によれば平民の語に通じているとも言えようか。

孰れの国にも国歌なるものがなくてはならない。然し我日本にはまだ是がない、「君が代」は国歌ではない、是は天子の徳を讃へるための歌である、国歌とは其平民の心を歌うたものでなくてはならない、国は実は平民の所有であつて、貴族の所有ではないから、国の理想は其平民の中に在つて貴族の中にはない、平民の心を慰め、其望を高くし、之に自尊自重の精神を供する歌が、日本国民の今日最も要望する所のものであると思う。

(内村鑑三全集  
第三卷六三頁)

これは「歌について。」と題して万朝報に掲載した感想文の一節。この年月は明治三五年の十一月。これに先き立つ一年前のクリスマスの彼の随感を附記することも本文の理解の一助ともなる。

若しキリストにして生れざりせば此世は如何、シーザーアレキサンドルの徒は尚ほ陸続として世に頭はれしならん、君一人のために屍を其馬前に暴らすの忠臣義士は出しならん、然れども平民の為に剣を抜きしクロムウエル、ワシントンの如き武人は出ざりしならん、ルーテル、サボナローナの如き所謂社会的勇士ソシアルヒーローなる者は生れざりしならん、ホレス、ヴァーギルの如き宮廷に媚を呈するの詩人は出でしならん、然れどもダンテ、ミルトンの如き平民的詩人は出ざりしならん、キリストの生れざる世界は貴族帝王の世界なり、人を奉て神とし仰ぎ一人の栄光を致さんが為めに万民の枯死する世界なり、キリストに依て筆も剣も脳も貴族の用を為さずして平民の用を為すに至れり。

(同全集第一  
三卷三八頁)

五

周知のように内村は札幌農学校の第二期生であつた。彼がここに入學した時は、既に米人教師ウィリアム・クラークは帰国していた。彼の離日に當つて送つた馬上からのメッセージ Boys, be ambitious! は口伝えに上級生から内村の心巨に余韻を残していた。クラークのあの歴史とともに有名な送辭は何を含蓄していたであらうか。

思うにこれは東洋の天地に活躍せよとか新しい日本作りのイメージを  
持てと言つたことだらう。

内村も新しい日本作りのイメージを抱いた。そうした偉大な日本の未来像に憑かれたのはアメリカにおいて、しかもアメリカに反してであった。伝道の英語は mission 語源はラテン語の mitto 渡すの意。キリスト教国の誇においてアメリカは野蛮国としての日本にキリストの福音を伝えていた。しかしアメリカはそのミッションの資格に値したであろうか。日本はまたアメリカのミッションの対象として神に定められているであろうか。重ねて、これは内村には生か死かの課題であった。

日本は内村には古都でありそうして理想であった。それは恰もローマもダンテに古都でもあり理想でもあったように。これは言わば内村の日本の理想化であった。

人は内村のこうしたあり方をナショナルリズムと呼ぶかも知れない。それでよいのだ。だが彼のナショナルリズムは国際主義に対する反提言<sup>アンテイテーゼ</sup>としてはなくアメリカニズムへのそれであると解されなければならない。

内村は非キリスト国としての日本の誇りをキリスト教国としてのアメリカから侵害された。彼はこの挑戦に対し応戦した。そうしてこの戦いの記念碑は「Representative men of Japan」である。断るまでもなくこの書もまたアメリカ人を対象としてもなされ、その代表として選ばれたのは西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹と日蓮の五人。これらの五人はそれぞれ武士、太名、農民、儒者と僧侶の各階層の理想的人間像として描かれている一面、著者はキリスト教的信仰からこれらの人たちに來るべき日本のキリスト教的人間像の型を示唆<sup>テイプス</sup>していると言えるであろう。

愛国とは内村の愛用語であった。愛国はまた彼の遺伝性であった。し

かし内村の遺伝性としての愛国はその人間形成と信仰確立につれ精神性にまで高められて行った。「地人論」もまた彼の力作であろう。が内村の訴えようとするものは地形と構造から日本の世界史上に課せられた役割であり、彼はこれを天職と表現している。

日本をして米、亜の文明に接せしめし者は勿論地理学上の位置に依り、之をして亜細亜的の統一に堪へしめし者は其軸脈の南北して一國の統御を易からしめしが故なり、而して西洋主義の輸入に会して直に之に應ずるに至らしめしものは東西の横断脈ありて統一の下にありて己に自治割拠の制に馴致せしが故なり、東洋的の君主主義も我に施し得べし、西洋的自由制度も我は施行し得べし、我の制度は西洋に則り、西隣若し西洋を学ばんと欲するか、必らず我より之を学ばん、東隣若し東洋の長を取らんとするか、必らず我に於て之を認めん、両洋我に於て合すパミール高原の東西に於て相会し、二者の配合に困りて胚胎せし新文明は我より出て再び東西両洋に普かんとす。

内村の愛国が昇華したものに「初夢」と題し左の小品がある。

恩恵の露、富士山頂に降り、滴りて其麓を濡し溢れて東西の二流となり、其西なる者は海を渡り長白山を洗ひ、崑崙山を浸し、天山、ヒマラヤの麓に灌漑ぎ、ユダの荒野に到りて尽きぬ、其東なる者は大洋を横断し、ロッキーの麓に金像崇拜の火を滅し、ミシシッピハドソンの岸に神の聖殿を潔め大西洋の水に合して消えぬ、アルプスの嶺は之を見て曙の星と共に声を放ちて謡ひ、サハラ砂漠は喜びて蕃紅の花の如くに咲き、斯くて水の大洋を覆ふが如くエホバを知るの知識全地に充ち此世の王国は化してキリストとの王国となれり、我れ睡眠より



覚め独り呼ばりて曰く、アーメン然かあれ、聖旨の天に成る如く地に  
も成らせ給えと。(内村鑑三全集第  
一二卷三三八頁)

この大ヴィジョンを要約したのは彼の墓碑銘の

I for Japan; Japan for the world; the world for Christ; and  
all things for God. じあるじ。

右の一文に骨を挟み肉を附したのは彼の門弟藤井武の筆になる注一四「聖書よ  
り見たる日本」ではなからうか。また江源万里注一五の鎌倉講演も。

六

「基督信徒のなぐさめ」は著者の自伝ではない。内村は初版の序文に  
こう宣言している。確かにそれは近代的な意味で言われる自叙伝ではな  
い。自叙伝ではないが自由であることは内村の伝記を周知するものには  
一読して明瞭である。植村の説教は有名である。彼の説教に照応するも  
のは内村の告白であろうか。総じて内村の筆になったものは一つとして  
体験の濾過を経ないものがない。他面それらは体験の素材そのままでは  
ない。彼が自伝でないと限定し基督教文学と主張する論拠はこの辺にも  
あるのではないか。説教は上位に立つ。告白は等位に向う。

神学大全はトマス・アキナスの名著。読む者は説得する論理力に圧倒  
される。これには聞くことが義務づけられ問うことの自由が与えられて  
いない。ルターは神学大全の中において問うことの自由を得るための苦  
闘をした人ではなかったらうか。アキナスからルターを離すものは彼の  
告白的性格ではなからうか。人よ、その例証として「詩篇講解」を読  
め。ルターは内村の性格に類似している。そうして聖書との取組みに至  
っては類似する以上に接近している。

申命記にヅライバー氏あり、士師記にG・F・ムーア氏あり、預言  
書にデリッチ、チーニー、デビッドソン氏等あり、新約全体にベンゲ  
ルあり、マイヤーあり、其馬太伝に近頃発刊になりレアーレン氏あり、  
其路加伝にサンデー氏あり、其加拉太書にライトフト氏あり、其希  
伯来書と約翰書翰にウエストコット氏あり、其黙示録にミリガン氏ス  
キート氏あり、然れども是等のすべての註解書に優りて、最もよき聖  
書の註解は身の患難と心の苦痛となり、註解書は之省くを得て、然  
れども苦痛と患難と無くして聖書を解する能はず、新旧六十六卷の書  
は総て是れ悉く患難の中に書かれし書なり、故に患難を知らずして之  
を解する能はず、又患難に居らずして之を楽しむ能はざるなり。

近代の聖書学者は内村の聖書注解にアウト・オブ・デートなる多くのも  
のを指摘するだらう。にもかかわらず内村の注解は多くの人殊に人生苦  
に悩む人たちに愛読されている。それはその告白的性格のゆえにも。

一九二五年ガンジーは自筆伝を発表した。そのはしがきの中に彼は語  
っている。

政治の分野での私の実験は、今日、インドのみならず、ある程度  
「文明化された」世界にも知られているところである、わたしにとっ  
ては、それらは、それほど貴重な価値のものではない。したがってま  
た「マハトマ」の称号は、しばしばわたしを苦しめた。それがわたし  
を喜ばせたというような瞬間を一度も覚えていない。(世界の名著  
ガンジー六三頁)  
彼の自叙伝の中に頻々と見出されるのは「実験」である。これは経験的  
知恵と同義ではなからうか。「基督信徒のなぐさめ」の著者も実践的知  
恵の提供者となつたのではなかつたか。ガンジーも極度に戒心したのは

自己栄化であった。ガンジーがヒンヅウ教的な自己浄化をしたように、内村はキリスト教としての自己否定をした。

キリストを敵に附せし者、罪人の首にあらず、彼を十字架に釘けし者、罪人の首にあらず、人を殺せし者、姦淫罪を犯せし者罪人の首にあらず、罪人の首は我れ自身なり、神の恩恵に浴しながら永く之を濫用し、善と知りつつも善をなさず、悪と知りつつも悪を避けず、屢々神の聖霊を熄し、其聖意を傷めまつれり、若し亡ぶべき者あらば我は彼なり、我恩恵を蒙りし丈けそれ丈神に負う所の者となれり。若し万人にして救はれざらん乎、我は第一に亡ざるべし、然れども若し我にして救はれん乎、世に救はれざる者一人もなかるべし、我の救済は神の恩恵の試験石なり、我は自から救われて万民の救済を確めんと欲す。(内村鑑三全集第一卷二九六頁)

歎異抄が我が国の仏教文学において占める地位は何であろうか。思うに第一人称単数の資格で、愚禿とか極悪深重と自らを呼んだのはこの書の主人公を以て嚆矢とするのではなからうか。

他力本願においては阿弥陀の慈悲と凡夫の罪業とは表裏する。この表裏関係の比重がそれぞれに告白にあらわれているように感じられる。親鸞の場合はむしろ後者の方にあつたと考えられたであろうか。

神の栄光と自己滅却 *Glorification of God. と Annihilation of self.* キリスト教の教義もまたこの二者の呼応と緊張とに要約することを許されるだろう。ジョン・カルヴィンにあっては神の栄光に、ルターでは自己滅却にムードが懸っているのは何人も読み取れるところである。

内村はこの意味でもルターに近く、親鸞に通つていえると言えないだろう

うか。植村正久の後継者は高倉徳太郎である。小塩力著高倉徳太郎伝によれば彼の罪惡觀が植村よりも内村に親近していると漏らしている。恐らく内村と高倉との出会いは個人交渉によらなかつたろう。彼もまた白鳥と同じように内村の心にその雑誌や著者を通して、触れて行ったに違いないようだ。

神道は不潔を忌む。儒者は不徳を恥じる。仏者は罪業に泣く。基督者内村は原罪と戦つた。彼は自ら罪人と、いな、罪人の頭と告白した。第一人称単数の主格において。彼は正しく日本の基督教文学における親鸞か。

## 七

水産学者として社会コースにスタートをした内村は聖書学者となつた。聖書は彼に読む言葉でなく生きる言葉であつた。旧新約聖書は彼の言語環境でありまた精神世界であつた。では彼が聖書研究を使命とした時、水産学を含めた自然科学は悉くレーテの河に投じられたであろうか。彼の天文、地理、植物などに向けられた関心が晩年まで弱まることがなく研究はますます熱度を加えた。

主意的に原罪と対決した彼は主知的に進化論に端を発し宗教と科学との調和に腐心した。彼は科学と宗教の関係を短想で述べている。

科学に無限の進歩があるが宗教に進歩はない。宗教は神の性格の現はれであつて、此現はれは一度あれば夫が最後である。故に宗教に在りては改革はいつでも原始に還る事である。新しい宗教はいつでも偽りの宗教である。科学と宗教に由て築き上げられし宗教の如きは頼るに足りない。(内村鑑三全集第一卷八五三頁)

これだけを読めば内村にあっては宗教と科学とは相容れない他者である。彼は他に二種の進化論を紹介し宗教と科学との調和を仄めかしている。

進化論に二種ある。無神的進化論と有神的進化論と是れである。無神的進化論は天地は其に自身にて、より大なる能力と知恵の指導なくして、無限に進化すると云ふのである。之に対して有神的進化論は云ふ天然に其れ自身を發達するの能力はない。天然自体が自働体でなくして受働態である。進化は神が万物を造り給ふ途であると。そしてダウイン自身が無神的進化論者でなく有神的進化論者であった。「種の起源」の最後の一言が此事を証して余りある。(同七六七頁)

彼は専門的な科学者ではない。その関心と研究とはどんなに強かつたにしても。彼のこうした資格に応わしい名があれば天然観察者であろう。この事に就いて例のように彼自身をして語らしめよう。

天然は神が事を為し給ふ時の方法である。之に順序がある、之は亦、時間を要する、之に技術がある、亦優美を缺かない、天然は単に正直一方ではない、亦理想のみではない、天然は奸策をば弄しないが、然し適當なる方法を講ずる、天然は理想的なると同時に亦甚だ實際的である、天然は極端に走らない、聖くして慧くある、天然は刺激するのみならず訓導する、彼は若し預言者でないならば忍耐強き教師である、我らは完全に神に事へんと欲して靈のバプテスマのみならず、亦天然を以てする実物的教育を要する。(同九七頁)

日本文学の優美を醸し出すのは花鳥風月である。

へブル文学において、その雄大を打ち出すのは星辰山河である。アモ

ス、ホセア、イザヤ、テレミヤなどの記録預言者たちはその取材を天然に求め神を讃え人を警めている。内村は「天然詩人としての預言者エレミヤ」の冒頭に

預言者は詩人であり、詩人は預言者である、二者の間の区別を立てることは甚だ難い、預言者は神の旨を伝ふる者であつて、詩人は天然の心を語る者であると言ふても二者の間の区別は立たない、何故となれば神の旨は解らないからである、故にすべての預言者は能く天然を解し、すべての詩人は能く神の旨を知る、預言者も詩人も均しく直に神より遣られたる者であつて、人よりに非らず又人に由らず、直に神に由て立てられたる者である、若し強いて兩者の間に区別を立てんとするならば余輩は預言者は昔の詩人、詩人は今の預言者と謂ふのが最も適切であると思ふ、二者は同階級の人である、儀式に重を置く儀式家、文字を争ふ神学者の正反対に立つ者であつて活きたる神に最も近く立つ者である。(内村鑑三全集 第四卷四九六頁)

先に紹介した「羅馬書の研究」の中の彼は自筆を以て

「宇宙万物は今や呻きつつ産みの苦みに於てある。大なる母宇宙は完全なる宇宙を産出して、完全なる救を施されたる神の子たちを迎へんと、今や呻き苦みつつある。虚空に渦を巻いて新宇宙を造らんとしつつある星雲、地獄の釜の如くに熔岩を以て沸騰する噴火口、肉食獣の襲撃に遭うて悲鳴を挙ぐる鹿と山羊、何れも宇宙の呻きならざるはない。然れども希望なき無益の労苦ではない。希望に満つる産みの苦

みである」と要約している。

詩才において出藍の誉れを得た藤井武はこれを評して、

「それは詩か事実か、詩でもあれば事実でもある。すべての人が苦しんでいる。万物が産まうと努力している。不完全なる母宇宙が完全なる子宇宙を産出せんとするその努力に人生があり自然がある。而してその途を示すものが羅馬書であるが、之を右の如き言葉を以て註釈し得る人はほかにまたあろうとは思われない。」

と絶賛している。内村鑑三が世を去ったのは昭和五年の三月二八日である。その臨終の言葉を次に記す。

「宇宙、万物人生悉く可なり。言はんと欲すること尽きず。人類の幸福と、日本国の隆盛と宇宙の完成を祈る。」

藤井武は内村を大きな<sup>注一六</sup>Xと呼んだ。内村の評価の規準はどこにあるのだろうか。彼の事業か、そのイメージか。

八

日清戦争の勃発に際し、Justification of the Corean War と題し「彼はこの戦争の目的を是認した。彼の名を歴史的に不朽にした絶対非戦論者内村鑑三の日露戦争以前の姿はこれであった。カトリック教会をその教義と組織との故に嫌悪した彼はその実体と行事をば賞讃するに吝かでなかった。彼は行動の面でも文筆の面でも矛盾の限りを露呈した。このことのため彼は人々に糾弾を浴せかけられた。誇張からでもなく謙卑からでもなく罪人の頭と公言した彼は、しかし、こうした他責に対しては少しも怯まなかった。彼はこのため詩人ホイットマンの句を引き合いに出した。

我に大なる矛盾あり、そは我は大なればなり。

昭和二年三月三十一日、矢内原忠雄は内村鑑三の記念講演を行なった。演題は「内村鑑三の十の戦」(矢内原忠雄全集第(二四卷三四六頁)十の戦とは彼の波瀾万丈の生涯の別名である。この波瀾万丈の生涯は他に類例のないものはなかるうか。彼はこの波濤の生活の中において得たものは何であつたらうか。それは思想体系ではなかつた。それは精神韻律であつた。次に掲げる矢内原忠雄の評言はこれの傍証とはならないだろうか。

先生は一つの時には真理のある一面に百パーセントの絶対的重要性をおき、他の時には他の一面に同じく百パーセントの絶対的価値を認める人でした。(右全集第二四卷三一六頁)

彼の著書の中洛陽の紙価を高くしているのは何だろうか。アンケートは未だ聞かされない。想うに「羅馬書の研究」を第一に「一日一生」がこれに続いているのではなかるうか。「一日一生」は彼の日記である。もしこの書に比較されるものがあればルターの「卓上小話」でもあろうか。

A poet is born, not made.  
「詩人は生れる者であつて、作られるものではない」とは人々に膾炙された合言葉である。これは詩人の天性を歌ったものであろうか。これはむしろ詩人のあり方を匂わしているようにも解される。人は創意とか創作と言う。どんなことが意味されているのであろうか。

詩材は来る。詩魂は捉える。詩筆は動く。このような過程は文字通り何処から来て何処に去るかを知らない風に似ている。風のギリシア語は Pneuma。これは英語の Spirit に相応する。内村の人間像のこの類であらうか。

詩は成る、作るべからず、美の思想は美き言辭と共に臨る、文を練

るを要せず、高く思ひて潔く行へば足る、詩は勇者の事なり、文士の業にあらざ、敢為以て何人も詩人たるを得るなり。(内村鑑三全集第一二卷四九〇頁)

芸への姿勢として無心が歌われる。またその極地として無我が憧れとなつている。これらの無心とか無我またそれらに對置さるべき語を見出すとすれば「贖われた我」でもあろうか。「贖われた我」を告白しているのはパウロがガラテヤ人に与えた手紙の一節。

生きてゐるのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておらるのである。(ガラテヤ人への手紙二―二〇)

白鳥の内村鑑三論の読後印象は、彼が無我の境地を内村に期待しつつそれを与えられない不満感が残存していることである。藤井武は内村鑑三の面目を捉えて余すことがなかった筆頭の門人である。彼の「預言研究」はその力作中の力作である。彼は預言者の最終の定義を下のように語っている。

我らは一つのものを知る。一つの確かな意義が彼らすべてに共通していることを認める。それは、自分の語るは自分の言ではなくして、或る他の者の言であるとの意識である。およそ預言者と呼ばれるものうち、一人として、自分の思想や自分の欲求を述べているつもりのはなかつた。彼らはみな或る他の者は迫られ、その者に代つて口を開いたのであった。(藤井武全集第三卷三頁)

プラトンは「国家論」において政治家の理想像として掲げるのは「哲人」である。プラトンにこの哲人のイメージの発想を促したのは彼の師ソクラテスの臨終の姿であった。内村と藤井との関係はソクラテスとプラトンのそれに擬えて誤らないであらう。藤井武の預言者像は内村鑑三

なしには存しなかつたらう。

む す び

内村の著書・参考文献のリストは現代日本思想大系第五卷の巻末に載せられている。これによつても彼の評価の角度は人さまざまである。が彼の評価の最後の決め手となるのはその信仰ではなからうか。また彼が歿後に感化と影響を及ぼしているのは、彼の在世中の文書活動であると言つても差支ないだろう。内村鑑三とキリスト教文学との関係に論及するのも無駄とは思われない。

内村鑑三の著書の需要は今なお絶えぬと言われる。これは一面人々の無教会主義への関心の高まりでもあろう。教会史上において無教会主義はどのような位置づけをされるか。ある人は教会の支派としての教派注一八の性格を与えようとしている。私たちは、これに對し、ただ一つの問を投げたい。いずれの教派が、無教会主義の先駆者のように実の豊かな文学的な開花と結実とを示したか。

注一 一五二一年四月一七日、この会議でルターは反カトリック教会の立場を宣言した。

注二 渡辺善太全集第六卷 七六六頁

注三 名目は別居。その経緯は内村鑑三全集からは知ることが出来ない。

注四 レギーネ・オルセンとの恋愛によりキェルケゴールの詩才が刺戟され、婚約破棄によつて罪の意識が深くなった。

注五 Sartre Resartus 一八三六年、アメリカで出版。内村の英文は発想策法文でもこの書に影響されている。

注六 神曲の倫理思想はアリストテレス著ニコマコス倫理に準拠している。

注七 殊に一卷の二四―二六頁にこれが表われている。そはこの大いなる詩題の高さに

永遠の摂理をわたしは証して 神の途を人々に義しとすべく

藤井 武 訳

注八 カルヴェインの主著。プロテスタントの組織的な神学書の最初のもの。

注九 キリスト教大事典六三〇頁

注一〇 マタイによる福音書七・九

注一一 出エジプト記 二〇・七

注一二 論語為政篇

注一三 この人物の選び方やその論法は Carlyle : Heroes, Hero-Worship を  
思わせる。

注一四 日本精神史を基督教的に解釈したもの。

注一五 承久の乱の非を皇室に帰し、日本の国体にメスを入れたもの。一卷の書  
となっている。

注一六 藤井武全集第一二巻 一一六頁

注一七 ヨハネによる福音書三・八

注一八 これはドイツの見方、キリスト教大事典 二九九頁